ドイツ・フライブルクに半年滞在して[†]

屋代 如月*

My 6 Months Sabbatical Stay at Freiburg, Germany

by

Kisaragi YASHIRO *

神戸大学の若手教員長期派遣制度を利用して、2011年8月から2012年2月までの6ヶ月間、ドイツのフライブルク (Freiburg) にあるフラウンホーファー研究機構の材料力学研究所 IWM に客員研究員として滞在した。有名なマックスプランク研究所が基礎物理をターゲットにしているのに対し、フラウンホーファー研究機構は科学の様々な応用に重点を置いているのが特徴である。IWM 所長を兼務しているカールスルーエ大学の P. Gumbsch 教授は、2001 年に大阪大学で開催された国際会議以降、何回かお会いしていたことと、京大在学時の後輩である東京大学生産技術研究所の梅野宜崇准教授がカールスルーエ大学に1年滞在していたことから、梅野君を通じて受け入れ教授となつていただくようお願いしたところ快諾いただいた。カールスルーエとフライブルクのどちらを希望するか尋ねられたが、2006 年に国際会議 MMM2006 で訪れたことがあるフライブルクを迷わず選択した。後で聞いたのだが、フライブルクはドイツ人がリタイア後に住みたい街 No. 1 として挙げており、治安が良くのんびりした雰囲気がある。大学ではないため長期滞在者の宿泊施設がなく、また IWM は市街中心から離れた工業地域にあるため、IWM の事務員の方が紹介してくれたアパート (月 500 ユーロ) を渡りに舟と契約した。その際、研究所から直線距離 1km 程度であることは google マップで確認していたのだが、渡航直前に再確認したところ地図の等高線が密であり高台の高級住宅地の一番上にあることが判明し、ドイツ滞在中は毎日自転車での山の上り下りをするという健康的な生活を強いられることになる (教訓: 距離だけでなく等高線もチェックすべし)。写真 1 はアパートのテラスからの眺望である。夏は鳥のさえずりで目覚める素晴らしい環境ではあったが、近隣の住民ならびにアパートの大家はバカンス中長期不在となるため一人留守番させられている気分であった。

Gumbsch 教授は IWM の近くのグンデルフィンゲンに住んでいたが、勤務は主にカールスルーエ大学であったので、計算材料グループ長の C. Elsasser 教授の下で IWM に滞在することになった。同室となった Dr. Matous Mrovec は非常に気さくな性格で、また年齢・家族構成が筆者と同じであることから意気投合し、彼のおかげで単身 6 か月の滞在にもかかわらず非常に楽しい時間を過

写真 1 アパートのテラスからの眺望

ごせた。同じ研究グループには、日本のアニメが好きだというフランス人ポスドクのピエール (33 歳独身) や、やたら早口で話が冗談なのか本気なのか区別が難しいアダムなど個性的なメンバーが揃っていて、特にピエールは youtube のリンクをメールで送ってきては「you see? It's crazy!」と常にこちらの部屋に来ては吹き出す、というのが日常であった。写真 2 は IWM の中央棟 (実験棟などは別)、写真 3 は 11 月にアダムとピエールの誕生日を祝ってケーキが振る舞われた際の様子である。

IWM の周りにはマクドナルド、バーガーキング、そして離れたところにイケアのビュッフェがあるだけで昼食の選択肢がなかった。他のメンバーは電力会社の食堂の 5 ユーロの昼食を利用しており、最初は同席していたが質より量という感じであるため小食の筆者には向かず、もっぱらバーガーキングでホッパー (ドイツ語発音、日本だとワッパー) 単品 1.69 ユーロを利用していた。当時は 1 ユーロ 100 円を切る超円高だったこともあるが、ドイツでは外食は高い (消費税 19%) ものの食料品は極めて安く、500ml の缶ビールは日本でも販売されている Becks や Bitburger Premium (日本では 330ml で 350 円で輸入販売@2013 年 11 月調べ) が 0.85 ユーロ程度であった。Gumbsch 教授のおすすめはフライブルクにあるシュバルツバルト (黒い森) の地ビール Rothaus Pils であるが、330ml で 1.85 ユーロ程度であったと記憶している (525 円@yahoo ショッピング)。ドイツ語がしゃべれ

[†] 原稿受理 平成 25 年 11 月 20 日 Received Nov. 20, 2013 ©2014 The Society of Materials Science, Japan

* 正 会 員 神戸大学大学院工学研究科 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町, Graduate School of Eng., Kobe Univ., Nada-ku, Kobe, 657-8501

写真2 IWMの中央棟

写真3 計算グループメンバー

ないドイツ人を自称するほどビール好きの筆者には天国のような環境であったが、帰国後の健康診断では尿酸値が再検査に引っかかってしまったことを付記しておく。

10月頃まではサイクリングが楽しめ、現地で購入したロードバイクでライン川のほとりのブライザッハ・アム・ライムやティティ湖、サンクトペーターなど週末になるといろいろ遠出していた（カトリックのため日曜日はほとんどすべての店が閉まってお暇をつぶすところがない）。広大なトウモロコシ畑や放牧地の中にサイクリングロードが整備されていて、写真4のように分岐点には標識があるのだが、行先は書いていないためどちらに行けばよいのかわからずしばしば迷走した（google マップで事前調査するも、途中の小さな町の名前まではフォローできない）。11月に入ると夜が早くなり、また天気も常に曇／雨の不安定な天気となって、欧州の人たちの夏を楽しむ気持ちを実感した。一方、クリスマスは現地の人にとっては冬の楽しみであり、1か月前から街全体がその準備で華やかになるが、クリスマス休暇時はこれまたほぼすべての店が閉まるため単身渡航の身にはさびしく、食料品の確保も含めて「サバイバル」という感じであった。しかし、筆者が小学生の頃は日本でも正月3日は同じような雰囲気であったことを思い出させ、アルバイト・派遣社員により24時間年中無休・安くて便利を実現している日本が、果たして精神的に豊かであるのかと再考させられた次第である。なお、約2週間のクリスマス休暇中、ローマ訪問も考えたが欧州は同じように店が閉まっているために断念し、ピエールから借りた無数の映画DVDとインターネットで孤独に過ごした（教訓：単身の場合、カトリック地域のクリスマス休暇時期は避けるべし）。また、年越しの際に花火を鳴らすことは聞いてはいたが、雨だというのに30分ほど前から鳴り始め、正直あきれほど鳴っていたのが印象に残っている。

紙面が尽きたためIWM滞在時の研究の話題を書けないのが遺憾であるが（心底残念であるが）、半年間のドイツ滞在の様子をちょっとでも身近に感じていただければ幸いである。写真5は、アパートから3kmほど、フライブルク中心街のすぐ横にある Schlossberg の展望タワー

写真4 トウモロコシ畑の中の自転車標識

写真5 フライブルク中心部

からの様子である。土曜日には大聖堂回りに市場が開かれ、屋台のブルスト2.5ユーロは特におすすめである。最後に、Gumbsch 教授の自宅に招いていただいた際に、ご自身もサバティカルでサンタモニカに行くことが決まったと喜んでいらしたが、やはり渡航先の雰囲気・気候というのも重要なファクターであることを後進の方へ進言して筆を置かせていただく。